

カリブ海地域におけるイスラム社会の形成と現況

Islam in the Caribbean: its history and present state

伊藤 みちる¹

¹大妻女子大学国際センター

Michiru Ito¹

¹International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：カリブ海，イスラム，生活

Key words : the Caribbean, Islam, Life

抄録

カリブ海地域におけるイスラム社会の規模は島々によってまちまちである。そのイスラム教徒は、大航海時代以降のヨーロッパ列強の新大陸植民地政策に関連し、世界各地からカリブ海地域に連れて来られた者たちが主流である。そのためカリブ海地域には、多文化、多民族・多人種が集まる、コスモポリンなイスラム社会が形成されている。そのイスラム社会は、21世紀のカリブ海地域においては拡大を続けている。その中で、急進的で過激な思想を持つイスラム教徒も出現しているが、カリブ海地域におけるイスラム教徒の多くは、キリスト教徒やヒンドゥー教徒などと、平等かつ重要な文化構成要素としての地位を築いている。

1. はじめに

カリブ海地域社会で、独特の規律に則って生活しているのは、世界中から移住してきたイスラム教徒たちである。カリブ海地域全体をみると、そのイスラム教徒の多くは、ヨーロッパ列強によるカリブ海地域の植民地開拓・経営の労働力として、送り込まれた者や、英国やフランスに統治されていたインドから、19世紀にカリブ海の英国領やフランス領の砂糖きびやカカオ、コーヒーなどのプランテーションに送り込まれた年季契約労働者の子孫である。その他にも、英領アメリカからイスラム教徒である退役アフリカ元奴隷兵士が移住してきたり、奴隷貿易廃止後に大西洋で拿捕された違法奴隷貿易船から救出されたアフリカ人がカリブ海地域に連れて来られたりした。加えて、中東からのイスラム教徒移民やカリブ海地域出身者のイスラム改宗者など、カリブ海地域のイスラム教徒の背景は多岐にわたる。

21世紀のカリブ海地域総人口に対するイスラム教徒の人口は、約8%である。しかし、カリブ海地域の地域や島々によってイスラム教徒人口は異なる。オランダ領カリブ領域サバやフランス海外

県グアドループなどにおいては、正式なデータとしてイスラム教徒数が判明していない。しかし他方で、スリナムや、ガイアナ、トリニダード・トバゴにおいては、イスラム教徒が総人口に占める比率はそれぞれ28%、13%、8%であり^[1]、社会の一部としてイスラム教徒の存在やイスラム文化が根付いている。

本稿では、カリブ海地域のイスラム社会について、カリブ海地域への移住史や現在のイスラム社会の実態、またそれが抱える問題について、現地での聞き取りや既存の資料を取り纏めたものを提示し、多民族が共生するカリブ海地域社会の理解を促進することを試みた。

2. イスラム社会形成史

2.1. カリブ海地域の最初のイスラム教徒

大航海時代のヨーロッパ列強の新大陸植民地政策は、カトリック布教を大義名分として推し進められた時期もあったが、結果としてコスモポリタンなイスラム社会を形成するに至った。トリニダード島に事務所を構えるイスラム伝道師組合のカリブ海地域南アメリカ支局によると、2019年現在、

カリブ海地域にはおよそ 30 万人のイスラム教徒が存在する。

カリブ海地域に存在するイスラム社会の特徴は島の数だけ存在するといわれ、それぞれに異なる特徴を持つ。その特徴は、程度の差はあれ、旧宗主国の植民地支配体制、他にどのような「人種」・民族・宗教と共存しているのかということ、独立に至る歴史などによって形作られ、それぞれのイスラム社会は、多様で非常にコスモポリタンな社会となっている。現在のカリブ海地域の数多くのモスクでは、アフリカ系、インド系、インドネシア系、モロッコ系、シリア系、レバノン系など、さまざまな文化、慣習を持ち、見た目も異なる「人種」・民族のイスラム教徒が肩を並べて礼拝している。このような非常に国際的なイスラム社会が形成された第一の要因は、大航海時代に「発見」したカリブ海地域を植民地として開発するために、ヨーロッパ諸国がカリブ海の植民地へ連行した奴隷の多くがアフリカ大陸の多様な地域のイスラム教徒であったからだ。



図 1. トリニダード島のセント・ジョセフ地区に建つモスクとイスラム学校

アフリカにイスラム教が伝えられたのは 8 世紀頃である。それも中東のイスラム教徒の武力による侵略や征服によるものではなく、アラブ商人や技術者などと交易を行ったアフリカの有力者が自らの文化に積極的にイスラムの慣例や祝祭を取り入れ、コーラン・法学・数学・天文学などの研究を行った結果、徐々にアフリカのイスラム化が進んだと考えられている。大西洋奴隷貿易によるア

フリカ人のカリブ海地域への強制移住が始まる 16 世紀までに、アフリカ大陸の広大な地域でイスラム教が信仰されており、カリブ海地域へ奴隷として連れてこられた人々の多くはイスラム教徒であった。

それを証明するのは、現存する史料や公文書である。カリブ海地域に奴隷として連行された人々の多くは西アフリカのアシャンティ王国、マンディンゴ王国、ハウサ王国、スス王国、フラ王国出身（現在のガーナ南部内陸部）である。それら王国内のイスラム派と非イスラム派の紛争に敗れたイスラム派が、非イスラム派によってヨーロッパ奴隷貿易商人に売られ、カリブ海地域へ運ばれたのである。

イギリスの政治家で歴史家でもあったブライアン・エドワードは、ジャマイカの邸宅で働いていたマンディンゴ族（セネガル、ガンビア、ギニアビサウなど西アフリカの広域に住む民族）の使用人について、彼らの出身地に割礼の慣習があり、父親に教えられた祈りを欠かさず、コーランを暗誦し、金曜日は断食すると、1819 年に観察に基づいて記録している^[2]。また 1833 年の英領カリブ海地域における奴隷解放を監督するために英国政府よりジャマイカに派遣されたリチャード・マッデン特別行政長官は、送られてきた 3 人の奴隷がアラビア語の読み書きをすることができ、コーランの一節を書き記して見せたと記録している^[3]。

トリニダード島において完全な奴隷解放が実施される直前である 1838 年 1 月 12 日付けの、アフリカ帰還に係る費用負担を請求する英国植民地省に宛てた請願書が英国に現存する。これはアフリカ奴隷としてトリニダード島に連れて来られ、当時はすでに自由黒人であった者たちが起案して執筆したものである。請願書には、彼らはマンディンゴ出身のイスラム教徒で、物静かで平和的な社会の一員であり、英国による庇護と慈悲を感謝しているとの一文も存在する。文末には、12 人のイスラム名と英語の通称が記載されており、それぞれの名前はアラビア文字で署名されている^[4]。

加えてジャマイカやスリナムをはじめカリブ海地域に多く現存するマルーンと呼ばれる逃亡奴隷を先祖とするコミュニティでは、現在も一般的な挨拶として「アッサラームアライクム（あなた方

の上に平安あれ)」と言うイスラム教徒同士が交わす挨拶が使われている^[5]。

またハイチは、1804年に革命を成功させ、カリブ海地域で最も早く「自由黒人国家」を樹立した。その革命成功の鍵となったハイチ全土の戦略的な奴隷蜂起が、計画から奴隷同士の意思疎通までアラビア語で行われていたとされる。そしてイスラム教こそが、アフリカの様々な地域出身の奴隷たちを精神的にまとめる重要な役目を果たしたといわれているのである^[6]。

2.2. 英領北アメリカから

19世紀初旬には、英領北アメリカのジョージアにおいて奴隷として働いていたアフリカ生まれのイスラム教徒が、米英戦争のための兵力として駆り出され、軍隊が解散されたのちに、自由黒人としてカリブ海地域に移住してきた。それらの者たちで現在も確認できるのは、1816年にトリニダード島南部へ移住してきた、現在もアフリカの赤米を丘陵で耕作している、メリケンと呼ばれる人々である^[7]。

加えて、1817年から1825年に、新たなアフリカ系イスラム教徒がカリブ海地域に移住してきた。元々は英領において奴隷であった彼らは、兵士として徴兵され、英国軍の一部であった西インド諸島連隊に属していた。その連隊が解散した後、元兵士の一部がカリブ海地域に移住してきた^[8]。

さらに、1807年には英国において大西洋奴隷貿易が廃止された。そのため、それ以降は英国国旗を掲げた奴隷貿易船は違法ということになった。そして英国海軍が発見した、いくつもの違法奴隷貿易船の積み荷であったアフリカ人は、最寄りの英領カリブ海諸島に連れて行かれ、定住せざるを得なかったという事例もある。アフリカ大陸から大西洋を通りカリブ海または北アメリカに向かう船の航路に位置するカリブ海最南端のトリニダード島には、こうして海上で救助されて自由な身分のアフリカ人として移住したイスラム教徒が特に多く存在する^[9]。

2.3. イスラム労働者の入植

19世紀前半の奴隷貿易の禁止とカリブ海地域における奴隷制の廃止によって、ヨーロッパ諸国は植民地におけるアフリカ奴隷に代る労働力確保の

必要性に迫られ、世界中の植民地からカリブ海地域に契約労働者を移住させた。大西洋奴隷貿易以来行われてきたヨーロッパ諸国主導のカリブ海地域への移民流入は、再びカリブ海地域にイスラム色を追加させることとなった。

カリブ海地域の英国植民地であったトリニダード島やガイアナにはインドから、オランダ植民地であったスリナムやキュラソーにはインドやインドネシアから、フランス植民地であったマルティニークやグアドループ、そして仏領ギアナにはマリ、モロッコやアルジェリアから、イスラム教徒の移民がやってきた。カリブ海地域のスペイン植民地であったキューバやプエルトリコ、ドミニカ共和国には、ハイチなどの近隣諸国からの小規模なアフリカ系イスラム教徒移民の流入にとどまった。

2.4. シリア・レバノンからの移民

19世紀末から20世紀初頭には、イスラム教国であるオスマン帝国に支配されていた現在のシリア・レバノン周辺地域から、約60万人が新大陸に安住の地を求め、移住してきた。その9割が東方正統カトリック教会系のキリスト教徒であったが、残り1割はイスラム教徒であった^[10]。その1割のイスラム教徒は、移住先のイスラム社会からさまざまな定住支援を受け、カリブ海地域に定住していった。

2.5. ブラック・パワー運動

1970年代、アメリカの公民権運動に端を発したアフリカ系の人々の地位向上を求めるブラック・パワー運動がカリブ海地域に到来すると、カリブ海地域のアフリカ系の人々の一部は、支配層による精神的束縛から逃れるため、原点回帰として、自らの先祖が信仰していたイスラム教へ改宗する者もいた。さらに奴隷と同様の非人道的な扱いを受けてきた年季契約労働者だった人々やその子孫にも、支配者層への富の集中や社会構造に疑問を抱き、「アッラーの下では万人は平等である」と説くイスラム教へ改宗する傾向が見られた。

2.6. 現代の新たなイスラム改宗者

現在も引き続きカリブ海地域のイスラム社会は拡大を続けている。カリブ海地域から留学や就職のため移住した欧米で人種差別を受けた者や、カ

リブ海地域における富の不平等な分配・植民地時代から続く、肌の色に基づいた社会階層と貧富の差に嫌気が差した若者などが、イスラム教に入信している。執筆者はトリニダード島セント・ジェームズ地区のモスクにて、二人の若い女性が入信する儀式を見学した。その二人と話してみたところ、決して特別な過激思想を抱いていることもなく、礼儀正しい21歳であった。そのモスクの関係者の話では、近年イスラム教に改宗するのは、スマホでSNSに興じ、ファストフードを食べ、オシャレに敏感なごく普通の若者であるが、その多くは高等教育を受けていない、最低賃金労働で生活している者たちである。彼らは、イスラム教においては神の前で全てのイスラム教徒が平等であること、そして世界に広がるイスラム教徒同士の強い仲間意識に惹かれるのだ。



図2. “Feed the Hungry”の標語を掲げ、モスクの売店では困窮者への炊き出しを行う。

3. イスラム人口

前章では、カリブ海地域において様々な肌の色、慣習、言語、食文化、服飾文化を持つ多様な民族・人種から構成されるイスラム社会が形成されるようになった経緯をみた。ただしカリブ海全域におけるイスラム社会の人口規模は、たとえイスラム団体による発表であっても、推定でしかない。なぜなら2019年8月現在、市民の信仰を問う人口調査は、トリニダード・トバゴ^[11]やガイアナ^[12]、スリナム^[13]やバルバドス^[14]などでしか行われていないからである。例えばイスラム教徒の人口規模が不明であるアンティグア・バーブーダ^[15]は、人

口調査において信仰の種類を問うているが、「イスラム教」の選択肢が存在しない。多数派のキリスト教に対し、「その他」の少数派であることは明らかになるものの、キリスト教以外の宗教は多岐にわたるため、イスラム教徒人口は明確ではない。

しかし、トリニダード・トバゴやガイアナのイスラム教指導者によると、たとえ人口調査でイスラム教徒の人数が明らかになっても、モスクに通う市民数に加えて、モスクには通わないイスラム教徒人口を推定し、推定信者数を打ち出すのである。このようなイスラム教徒人口について、1960年代～80年代のヨーロッパ諸国からの独立時における各独立国の総人口に対するイスラム教徒の割合は、旧オランダ領スリナムで28%に上った他は、4～15%であった^[16]。

2019年現在のカリブ海地域のイスラム社会は、拡大を続けており、植民地時代に到来した多様な民族・人種のイスラム教徒に加え、カリブ海地域にビジネス機会を求めてやってきたシリア・レバノン系やインド系の移民、また新たな改宗者などにより、さらなるコスモポリタン化が進んでいる。また近年は世界中のイスラム組織が「同胞」の兄弟を通じ、イスラム教普及支援やイスラム教育支援を積極的に展開している。例えば、トリニダードに本部を置くイスラム伝道師組合は、カリブ海・南米地域を管轄し、イスラム教徒の様々な活動への資金集め、出版、ラジオ・テレビ番組放送、イスラム教育支援、イスラム教徒同士の国や地域を超えた交流促進を図る有力組織のひとつとして活発に活動を行っている^[17]。

以下の表1.^[18]で示されているのは、カリブ海における言語別地域の総人口とイスラム教徒の人口である。表1. から、カリブ海地域においては、英語圏とオランダ語圏に多くのイスラム教徒が集中していることがわかる。

表1. 言語別カリブ海地域のイスラム教徒人口

	総人口	イスラム教徒数
英語圏カリブ海地域	5,836,601	172,250
フランス語圏カリブ海地域	7,178,572	2,600
スペイン語圏カリブ海地域	20,537,000	3,500
オランダ語圏カリブ海地域	635,415	121,000
カリブ海地域合計	34,187,588	299,350

3.1. 英語圏カリブ海地域

英語圏カリブ海地域として、トリニダード・トバゴ、バルバドス、ガイアナ、アンティグア・バーブーダ、バハマ、バルバドス、ベリーズなどの旧英領植民地であった独立国家と、バーミューダ諸島、モンセラット、アンギラ、ターコス・カイコス諸島などの現在も英国海外領土である島々が挙げられる。その中でも特にトリニダード・トバゴとガイアナは、アフリカ系のイスラム教徒の他に、インドからの年季契約労働者の子孫がイスラム社会を支えている。

表 2. 英語圏カリブ海地域のイスラム教徒数^[19]

英語圏カリブ海地域	総人口	イスラム教徒数
		5,836,601
トリニダード・トバゴ	1,360,000	110,160
ガイアナ	762,000	101,575

3.2. フランス語圏カリブ海地域

フランス語圏は、カリブ海地域で最初にヨーロッパ列強から独立を勝ち取ったハイチの他、現在もフランス海外県であるグアドループ、マルティニーク、そして仏領ギアナである。フランス語圏のイスラム教徒の特徴として、セネガルやマリなど西アフリカ出身者であることが挙げられる。マルティニークのイスラム社会は、主に経済的に豊かなパレスチナ移民から構成されており、常勤のイマームがイスラム教徒の集会所でイスラム教指導者として働いている。

3.3. スペイン語圏カリブ海地域

スペイン語圏は、キューバ、ドミニカ共和国、プエルト・リコから構成される。プエルト・リコには、約 2000 名のパレスチナ系イスラム・コミュニティが存在する。経済的に豊かである彼らは常勤のイマームを雇用し、二つのモスクを建設し、イスラムの信仰を守っている。

3.4. オランダ語圏カリブ海地域

オランダ語圏は、英語圏に次いでイスラム教徒が多い地域である。この地域は、キュラソー、シント・マルテン、ボネール、シント・ユースタ

ティウス、サバ、アルバといった小さなカリブ海の島々と、南米大陸に位置するスリナムから構成される。オランダ語圏カリブ海諸島のイスラム教徒は、アラブ系とインド・パキスタン系から構成されており、アラブ系イスラム・コミュニティの方が経済的に裕福であり、常勤のイマームを雇用し、より組織化した活動を行っている。

南米大陸のオランダ語圏であるスリナムのイスラム・コミュニティはカリブ海地域で最大規模であり、スリナム総人口の 28% を占めている (表 3. 参照)。そのイスラム・コミュニティは、①ジャワ系、②インド・パキスタン系、③アフリカ系の 3 つに区分できる。このうち③アフリカ系のイスラム教徒数は増加の一途をたどる^[20]。

表 3. オランダ語圏カリブ海地域のイスラム教徒数

オランダ語圏カリブ海地域	総人口	イスラム教徒数
		635,415
スリナム	425,000	120,000
オランダカリブ領域 / キュラソー アルバ / シント・マルテン	210,415	1,000

4. 結びに～カリブ海地域の現代イスラム社会

1990 年 7 月にトリニダード・トバゴの首都ポート・オブ・スペインにおいて、地元イスラム組織が公共放送網と議会を占領し、クーデター未遂を起こした^[21]。数名の犠牲者を出したこのクーデターに使用された武器は、米国在住のカリブ海地域出身のイスラム教徒が不正輸出によりカリブ海へ持ち込んだものであると判明した。クーデター未遂の首謀者たちは政府と交渉し、大赦によって降伏後に放免となり、現在もイスラム教指導者として活発に活躍している。さらに 2007 年にはトリニダード・トバゴ出身のイスラム教指導者とガイアナ出身のイスラム教徒が、イランのイスラム過激派武装組織と協力し、ニューヨークの空港爆破を企てたとして逮捕された^[22]。さらに近年、急進的なイスラム教徒はもとより、イスラム教に改宗した貧困層の若者が、いわゆる「イスラム国」へ渡航しているとの報道もある^[23]。

とはいえ、カリブ海地域のイスラム社会は基本的に非常に穏やかである。キューバ初のモスク建設は政府により禁止されたが、イスラム信仰は自

由である。バルバドスには3つのモスクが建つ。トリニダード・トバゴには登録されているモスクだけで85あり、モスク以外のイスラム教徒集会施設やイスラム教育施設も多数存在する。トリニダード・トバゴ、ガイアナ、スリナムにおいては、キリスト教、ヒンドゥー教の祝日と同様に、イスラム教の祝日が国民の祝日になっている。イスラム教の祝事をイスラム教徒でなくとも祝い、ラマダンの断食の際にはイスラム教徒でない人々はイスラム教徒に対する気配りを忘れない。イスラム教徒とヒンドゥー教徒やカトリック教徒の婚姻も決して珍しくない。イスラム教の祭りは非イスラム教徒も参加できるものであれば、国を挙げて楽しむ。イスラム教徒の新閣僚はコーランの上に手を置き宣誓を行い、イスラム教徒でヒジャブを着用している女性大臣も誕生した。全身黒ずくめのイスラム教の女性とビキニ姿の女性が同じビーチで遊ぶ。街中にモスクが堂々と、それもカトリック教会やヒンドゥー寺院やシナゴグの隣近所に建っている。カトリックが国教の国でイスラム教徒だけで構成されている村がある。このようなカリブ海地域においては、イスラム教徒であるというアイデンティティを失うことも、またマイノリティであるという肩身の狭い思いをすることもない。カリブ海地域におけるイスラム社会は、多民族が共生する社会において平等かつ重要な文化構成要素としての地位を築いている。

謝辞

My sincere and deepest gratitude goes to the Muslim community in the Caribbean, especially in Guyana and Trinidad. I am grateful to Jamaat al Muslimeen and Amir for their valuable information. I also would like to offer my special thanks to Mr. and Mrs. Shioyama, Mr. Cezair and Island Buddy Ltd. for their tolerance and support.

付記

本研究はMEXT 科研費 JP17K02034 と大妻女子大学人間生活文化研究所戦略的個人研究費（課題番号：S3008）の助成を受けたものです。

引用文献

- [1] “Muslims in the Caribbean”. IslamWeb. <https://www.islamweb.net/en/article/136012/muslims-in-the-caribbean> (accessed 2019-8-17)
- [2] Afroz, Sultana. “The Unsung Slaves: Islam in Plantation Jamaica”. *Caribbean Quarterly*. 41(3/4) September-December 1995: pp. 30-44.
- [3] Afroz, 1995.
- [4] “Petition of Mandingo Ex-slaves for Return to their own Country, Forwarded through Lt. Governor Hill”. Gerald Besson and Bridget Brereton. *The Book of Trinidad*. Paria Publishing, 2010: pp. 131-133.
- [5] Afroz, Sultana. “The Manifestation of Tawhid: The Muslim Heritage of the Maroons in Jamaica”. *Caribbean Quarterly*. 45(1). March 1999: pp. 27-40.
- [6] Khan, Aisha. “Islam, Vodou, and the Making of the Afro-Atlantic”. *NWIG: New West Indian Guide / Nieuwe West-Indische Gids*. 2012. 86(1/2): pp. 29-54.
- [7] Pinn, Anthony B. *African American Religious Cultures*. ABC-CLIO, 2009.
Laurence, K.O. “The Settlement of free negroes in Trinidad before emancipation”. *Caribbean Quarterly*. 1963. 1/2: pp.26-52.
Weiss, John Mc Nish. *The Merikins: Free Black American Settlers in Trinidad 1815-16*. London: McNish and Weiss, 2002.
- [8] Cartwright, Keith. *Sacral Grooves, Limbo Gateways: Travels in Deep Southern Time, Circum-Caribbean Space, Afro-creole Authority* (New Southern Studies). University of Georgia Print, 2013.
- [9] Archibald, Douglas. *Tobago Melancholy Isle, Vol. III 1807-1898*. Trinidad and Tobago: Westindiana, 2003.
Adderley, Rosanne Marion. “New Negroes from Africa”: *Slave Trade Abolition and Free African Settlement in the Nineteenth-Century Caribbean*. Bloomington: Indiana University Press, 2006.
- [10] Yvonne Yazbeck Haddad, Jane I. Smith. (eds.) *Muslim Minorities in the West: Visible and Invisible*. Maryland: Rowman Altamira, 2002.
Ingvar Svanberg, David Westerlund. (eds.) *Islam Outside the Arab World*. Routledge, 1999.
- [11] Trinidad and Tobago Central Statistical Office. “2011 Population and Housing Census Demographic Report”. 2011.

- [12] Guyana Bureau of Statistics. "Guyana Population and Housing". July 2016.
- [13] Suriname General Bureau of Statistics. Redactie Jack Menke. "Mozaiek Van Het Surinaamse Volk: Volkstellingen In Demografisch, Economisch en Sociaal Perspectief". 2019.
<https://www.statistics-suriname.org/wp-content/uploads/2019/02/mozaiek-van-het-surinaamse-volk-versie-5.pdf> (accessed 2019-8-15).
- [14] Official Website of Barbados. "Demographics"
<https://www.gov.bb/Visit-Barbados/demographics> (accessed 2019-8-12).
- [15] Government of Antigua and Barbuda. "Antigua and Barbuda 2011 Population and Housing Census: A Demographic Profile". June 2017.
<https://statistics.gov.ag/wp-content/uploads/2017/11/2011-Antigua-and-Barbuda-Population-and-Housing-Census-A-Demographic-Profile.pdf> (accessed 2019-8-14).
- [16] "Muslim Situation in the Caribbean".
<https://www.islamawareness.net/Caribbean/caribbean.html>. (accessed 2019-7-13).
- [17] "History of Islam and Muslims in Trinidad".
<https://www.caribbeanmuslims.com/history-of-muslims-in-trinidad/> (accessed 2019-5-3).
Muhammad, Brian E. "Nation of Islam progressing in Trinidad and Tobago". 2018.
https://www.finalcall.com/artman/publish/World_News_3/article_105075.shtml (accessed 2019-5-4).
- [18] "Muslims in the Caribbean".
<https://www.islamweb.net/en/article/136012/muslims-in-the-caribbean>. (accessed 2019-5-3).
- [19] 前掲[13]参照.
- [20] 前掲[13]参照.
"The Suriname Islamic Association (Surinaamse Islamitische Vereniging)".
<http://www.sivsr.org/index.php/about-us> (accessed 2019-8-13).
- [21] "Report of the Commission of Enquiry". Parliament of Trinidad and Tobago.
<http://www.tparliament.org/documents/rptcoe1990.pdf> (accessed 2019-5-14).
- [22] Buckley, Cara and Rashbaum, William K. "4 Men Accused of Plot to Blow Up Kennedy Airport Terminals and Fuel Lines". The New York Times. June 3, 2007.
<https://www.nytimes.com/2007/06/03/nyregion/03plot.html> (accessed 2019-5-4).
- [23] Graham-Harrison, Emma and Surtees, Joshua. "Trinidad's jihadis: how tiny nation became Isis recruiting ground". The Guardian. February 2, 2018.
<https://www.theguardian.com/world/2018/feb/02/trinidad-jihadis-isis-tobago-tariq-abdul-haqq> (accessed 2019-5-2).

(受付日：2019年10月2日，受理日：2019年10月16日)

伊藤 みちる (いとう みちる)

現職：大妻女子大学国際センター専任講師